3. 第７回情報処理安全確保支援士試験に向けて

3-1　情報処理安全確保支援士試験について

平成 28 年 10 月 21 日，経済産業省からサイバーセキュリティ分野において初の国家資格となる「情報処理安全確保支援士」制度を開始する旨の発表が行われました。それによりますと，情報処理安全確保支援士制度は，「近年，情報技術の浸透に伴い，サイバー攻撃の件数は増加傾向にあり，企業等の情報セキュリティ対策を担う実践的な能力を有する人材も不足する中，情報漏えい事案も頻発しています。このため，サイバーセキュリティの対策強化に向け情報処理の促進に関する法律の改正法が本日（平成 28 年 10 月 21 日）施行され，我が国企業等のサイバーセキュリティ対策を担う専門人材を確保するため，最新のサイバーセキュリティに関する知識・技能を備えた高度かつ実践的な人材に関する新たな国家資格制度を開始しました」とされています。また，情報処理安全確保支援士は，「サイバーセキュリティに関する知識・技能を活用して企業や組織における安全な情報システムの企画・設計・開発・運用を支援し，また，サイバーセキュリティ対策の調査・分析・評価を行い，その結果に基づき必要な指導・助言を行う者です。サイバーセキュリティの確保に取り組む政府機関，重要インフラ事業者，重要な情報保有する企業等のユーザー側及びこれら組織に専門的・技術的なサービスを提供するセキュリティ関連企業等のいわゆるベンダー側の双方において活躍が期待されます」と説明されています。

こうした背景の基に，平成 29 年 4 月から情報処理安全確保支援士試験（以下，支援士試験という）が実施されるようになりました。この支援士試験は，これまでの情報セキュリティスペシャリスト試験の流れをそのまま受け継ぐものですから，午前Ⅰ，午前Ⅱ，午後Ⅰ，午後Ⅱという四つの試験が行われることには変わりありません。

平成 30 年度秋期から令和元年度秋期までの受験者数，合格者数などの推移を図表 10 に示します。なお，合格率については，第 1 回から第 3 回までは 16%から 17%程度で推移し，第 4 回，第 5 回とも 18%台に向上しました。さらに，今回の試験では過去最高の 19.4%になり，約 5.2 人に 1 人の割合で合格者が生まれることになりました。そして，IPA の発表によりますと，令和元年 10 月 1 日現在，“登録セキスペ”の登録者数は 19,417 名に達し，登録することの有効性が意

識されるようになっています。

年　度	応募者数	受験者数	合格者数
平成 30 年度秋期	22,447（-3.2%）	15,257（68.0%）	2,818（18.5%）
平成 31 年度春期	22,175（-1.2%）	14,556（65.6%）	2,774（18.9%）
令和元年度秋期	21,237（-4.2%）	13,964（65.8%）	2,703（19.4%）

（ ）内は，それぞれ対前期比増減率，受験率，合格率を示す。

図表 10　応募者数・受験者数・合格者数の推移

3-2　出題予想

(1)　午前Ⅰ試験，午前Ⅱ試験

平成 30 年度秋期から令和元年度秋期までの 3 期にわたる試験から判断すると，午前試験については，次のようにいえます。まず，午前Ⅰ（共通知識）と午前Ⅱ（専門知識）を比較すると，午前Ⅰの出題範囲が広範囲にわたることなどから，合格基準点をクリアすることが難しく，午前Ⅱは，午前Ⅰがクリアできれば，比較的多くの受験者はクリアできるレベルのものと考えられます。ちなみに，午前Ⅰ試験と午前Ⅱ試験の合格率を示すと，図表 11 のようになります。

年　度	午前Ⅰ試験	午前Ⅱ試験
平成 30 年度秋期	51.7%	71.2%
平成 31 年度春期	50.8%	79.8%
令和元年度秋期	51.9%	86.1%

図表 11　午前Ⅰ試験と午前Ⅱ試験の合格率の比較

令和元年度秋期の午前Ⅰ試験の合格率は，平成 31 年度春期に比べると約 1 ポイント向上し，1 年前に実施された平成 30 年度秋期とほぼ同じ水準といえます。このように，午前Ⅰ試験の合格率は，支援士試験になって以来，一度も 60%を超えたことはありませんが，今回の 51.9%という数字は，低めの合格率になっています。このため，午前Ⅰ試験を受験する必要のある方は，図表 4 で示した，幅広い情報処理技術分野の知識を十分に把握して試験に臨むことが必要です。なお，午前Ⅰ試験には免除制度がありますので，この制度を利用できるように，応用情報技術者試験に合格するか，いずれかの高度試験の午前Ⅰ試験に合格しておくこ

とも一つの方法です。

午前Ⅱ試験の合格率は，86.1%でした。支援士試験はこれまで 6 回実施され，いずれも 70%以上の合格率になっていますが，これまでの中で最も高い合格率になりました。午前Ⅱ試験の出題内容は，過去問題からの再出題が多いことが特徴ですから，過去問題を中心にしっかり学習していけば，午前Ⅱ試験は比較的容易に合格できると考えられます。このため，午前Ⅰ試験のように特段の対策を考える必要はないでしょう。例えば，午前Ⅱ試験の対策としては，3 期前に行われた試験の問題（令和 2 年度春期試験では平成 30 年度秋期試験の問題）を中心に，それ以前の過去問題を重点的に学習しておくとよいでしょう。その半面，新規問題が増加したり，レベル 4 の出題数が増加したりすると，合格率は低下する傾向が見られます。このため，初めて支援士試験を受験される方は，あまり軽視しないことも必要です。

次に，午前Ⅰ試験の出題分野についてです。出題分野は，テクノロジ系（基礎理論，コンピュータシステム，技術要素，開発技術），マネジメント系（プロジェクトマネジメント，サービスマネジメント），ストラテジ系（システム戦略，経営戦略，企業と法務）の全分野にわたりますので，幅広い分野に関する知識が要求されます。平成 30 年度秋期から令和元年度秋期までの分野別の出題数は，図表 12 に示すとおりです。なお，午前Ⅰ試験で出題される 30 問は，応用情報技術者試験で出題された 80 問の中から抽出されていることが特徴です。

分　野	大分類	平成 30 年秋期	平成 31 年春期	令和元年秋期
テクノロジ系（17 問）	基礎理論	4	3	4
	コンピュータシステム	3	4	4
	技術要素	8	8	7
	開発技術	2	2	2
マネジメント系（5 問）	プロジェクトマネジメント	2	2	2
	サービスマネジメント	3	3	3
ストラテジ系（8 問）	システム戦略	3	3	3
	経営戦略	3	3	3
	企業と法務	2	2	2
合　計		30	30	30

図表 12　午前Ⅰ試験　分野別出題数

午前Ⅰ試験の分野別の出題数は，基本的にテクノロジ系が 17 問，マネジメント系が5問，ストラテジ系が8問という比率になっています。情報処理技術分野の知識だけではなく，プロジェクトマネジメントやシステム戦略，経営戦略などの知識も要求されます。このため，日ごろから情報処理技術全般に関する知識を修得するとともに，出題数が多いテクノロジ系やストラテジ系に関連する過去問題を多く解いていくようにしましょう。しかし，午前Ⅰの出題分野の全分野に関し時間を費やしていくことは，あまりお勧めできません。例えば，論理回路の問題などは，考え方を理解するのに少し時間がかかります。こうした問題に時間をかけても意味がありません。捨てる分野の問題を決めながら，効率的に学習していくことも必要です。なお，支援士試験は，情報セキュリティの専門家の方が多く受験されると思います。特に，午前Ⅰ試験から受験する必要のある方は，午前Ⅰ試験が大きな関門となることがありますので，午前Ⅰ試験の対策には，手を抜かないことが必要です。

次は，午前Ⅱ試験です。午前Ⅱ試験の出題数は 25 問，試験時間は 40 分です。出題の重点分野は，技術要素のうちセキュリティとネットワークです。この他には，技術要素のうちデータベース，開発技術のうちシステム開発技術とソフトウェア開発管理技術，サービスマネジメントのうちサービスマネジメントとシステム監査の分野から出題されます。平成 30 年度秋期から令和元年度秋期までの分野別の出題数は，図表 13 に示すとおりです。

大分類	中分類	平成 30 年 秋期	平成 31 年 春期	令和元年 秋期
技術要素	セキュリティ	17	17	18
	ネットワーク	3	3	2
	データベース	1	1	1
開発技術	システム開発技術	1	1	1
	ソフトウェア開発管理技術	1	1	1
サービス マネジメント	サービスマネジメント	1	1	1
	システム監査	1	1	1
合　計		25	25	25

図表 13　午前Ⅱ試験　分野別出題数

午前Ⅱ試験の分野別出題数は，これまでの傾向から判断すると，セキュリティ分野とネットワーク分野とを合わせて 20 問，データベース分野が 1 問という比率になっています。このため，技術要素から 21 問，開発技術とサービスマネジメントは，それぞれ 2 問の出題となっており，この比率は変化することはないでしょう。

なお，技術要素のうちセキュリティ，ネットワークは，出題の重点分野である他，データベース技術を含めた技術知識については，午後試験対策を行う上で重要な位置付けにある技術知識です。このため，これら三つの分野の技術については，十分に学習していくことが必要です。そうすれば，午前Ⅱ試験で出題される技術要素分野の問題は，ほぼ全問正解できるレベルになってくると考えられます。例えば，技術要素から 21 問出題された場合には，少なくとも 15 問以上は正解できるようになるでしょう。15 問正解できれば，合格基準点に達します。このため，午前Ⅱ試験は，特別な対策を実施する必要はなく，午後対策に必要な技術知識を十分に身に付けていく方がよいと考えられます。

(2) 午後Ⅰ試験，午後Ⅱ試験

午後Ⅰの試験時間は 90 分で，3 問の中から 2 問を選択して解答します。最近の傾向としては，3 問のうち，1 問は Web サイトのセキュリティないしはセキュアプログラミングに関する問題が出題されます。このため，できるだけ HTML やセキュアプログラミング関連の知識を身に付けておくことが必要といえますが，問題を解くレベルまで到達するには，相当の時間と努力が要求されます。問題選択に当たっては，あらかじめセキュアプログラミングに関する問題を選択するかどうかを決めておくとよいでしょう。この他，一度選択した問題については，最後までやり抜くようにすることが必要です。それは，問題文をよく読んでいけば，問題の中にヒントが記述されていることが多く，それらを手掛かりにして正解を導いていくことが可能だからです。しかし，ヒントを見つけることができるかどうかについては，各自が持ち合わせている知識が多いか少ないかなどの差によって決まります。

そこで，試験を受験するに当たっては，できるだけ技術レベルを向上させておくことが必要です。例えば，セキュリティ技術では，Web アプリケーションなどにおけるセキュアプログラミングをはじめ，メッセージ認証，本人認証，ディジタル署名，電子証明書の検証方法，暗号化技術，ネットワークやデータベースに

対する様々な攻撃とその対策，セキュリティプロトコル，VPN 技術，ファイアウォールの設定，IDS や IPS，迷惑メール対策など，多くの技術知識を吸収していくことが必要です。また，ネットワーク技術分野では，TCP/IP（HTTP，HTTPS，IPsec，TLS など）やインターネット利用・接続技術，DNS の仕組み，電子メールの配送の仕組みなど，データベース技術分野では，データベースに対するアクセス制御，SQL 文，RDB，データベースの排他制御やリカバリなど，幅広い技術を修得していく必要があります。さらに，JVN（Japan Vulnerability Notes）として公表されている脆弱性情報のうち重要なものや IoT のセキュリティ，パスワードレス認証方式など最近の動向，情報セキュリティポリシやリスク分析などのマネジメント系の問題も出題されるので，幅広く知識を吸収していくことが必要です。また，JIS Q 27001 や JIS X 5070 などの標準化動向の把握も忘れないようにしましょう。

次に，午後Ⅱ試験です。試験時間は 120 分で，2 問の中から 1 問を選択して解答します。午後Ⅱは，問題分量が 10 ページ以上にわたりますので，問題をよく読んで，解答を導いていくという基本的な姿勢を貫くことが大切です。そうすれば，正解を導くことができる問題が必ず出てきます。情報セキュリティに関する一定の技術知識を身に付けた上で，午後Ⅱ試験では，「あわてず，あせらず，あきらめず」という精神で臨むことが必要です。

また，午後問題の特徴は，出題内容が一つの技術に絞ったものよりも，複合的な観点から出題されることです。この傾向は，午後Ⅱ問題では特に顕著になります。そこで，セキュリティとネットワークの相互に関連した総合問題に対応できる技術力を養っていくことが必要になります。しかし，幅広いこれらの技術を十分に修得していくには，かなりの時間が必要です。試験の直前になってあせらないように，あらかじめ多くの学習時間を見込んでおき，計画的に学習していくことが必要です。また，一度，理解しても繰り返し技術知識をインプットしていかないと，すぐに忘れてしまいます。工夫をしながら継続的に学習していく姿勢を確立するようにしましょう。なお，試験問題では，単なる技術的な知識から解答する問題はそれほど多くありません。問題文に記述された内容に従って解答する問題の方が多いので，問題の記述内容を正しく理解し，その範囲内で考えていくとよいでしょう。そのためには，問題文に記述された内容を理解できるだけの基本的な技術力をまず身に付けていくことが必要です。また，午後試験は数十字程

度の記述式で解答します。記述内容については，考え方や根拠を明確に示す他，キーワードをしっかりと押さえた解答を作成することが必要です。

以上のように，情報処理安全確保支援士試験で合格するには，それなりの努力が要求されますが，合格すれば，情報処理安全確保支援士（登録セキスペ）の登録資格を有することができます。そして，登録申請など所定の手続きを経れば，正式に情報処理安全確保支援士として認められ，活動していくことが期待されています。学習計画をしっかり立てて，支援士試験に合格できるように努力していきましょう。

3-3　令和元年度秋期試験のデータ

(1)　午前Ⅰの問題

共通知識として幅広い出題範囲の全分野から 30 問が出題される試験です。出題分野の内訳はテクノロジ分野が 17 問，マネジメント分野が 5 問，ストラテジ分野が 8 問で，これまでと同じです。また，出題された問題は，従来どおり全て同時期に実施された応用情報技術者試験 80 問から選択された問題になっています。

以前から重点的に出題されているセキュリティ分野の問題が最も出題数が多く，これまでと同じ 4 問でした。また，新傾向問題といえるものは次の 6 問で（前回 3 問），これまでよりも多くなっています。参考までに，午前Ⅰ共通問題の選択元である応用情報技術者試験の新傾向問題は 15 問ありました。

・問 3　AI の機械学習における教師なし学習
・問 11　フォワードプロキシの説明
・問 18　PMO の役割の説明
・問 22　システム監査手続で利用する技法
・問 25　ファウンドリサービスの説明
・問 28　RPA の説明

問題の出題形式としては，文章の正誤問題が 21 問（前回 17 問），用語問題が 1 問（前回 3 問），計算問題が 4 問（前回 3 問），考察問題が 4 問（前回 7 問）で，文章問題と計算問題が増え，用語問題と考察問題が減っています。

出題内容としては，基礎理論は集合と待ち行列理論の問題で少し難しいものがありました。この分野以外の問題も過去問題の再出題ですが，やや難しい問題も

幾つかあり，全体的に従来よりも少し難しかったと思われます。

高度情報処理技術者の午前Ⅰ試験は出題範囲が広い中からの 30 問なので，対策としては，基本情報技術者から応用情報技術者試験レベルの問題を日ごろから少しずつ解いて基礎知識を維持することが大切です。

次に，出題内容全体を示します。下線を引いた問題（過去問）は高度午前Ⅰ試験であまり出題されていない内容ですが，基礎知識を確実に理解していれば，用語問題は消去法で，計算問題は少し時間をかけて丁寧に考えることによって解答できる内容も幾つかあります。

・テクノロジ分野……集合，待ち行列モデル，AI の教師なし学習，単方向リスト，平均アクセス時間，磁気ディスクの必要容量，キャパシティプランニング，エネルギーハーベスティング，媒体障害の DB 回復法，CSMA/CD，フォワードプロキシ，NAPT 機能，チャレンジレスポンス認証，ファジング，虹彩認証，レビュー技法，ソフトウェアの使用許諾
・マネジメント分野……PMO，アローダイアグラムの所要日数，インシデント及びサービス要求管理，クラウドサービス上の情報消失のシステム監査，システム監査技法
・ストラテジ分野……BCP，目標達成度の計算，ファウンドリサービス，PPM の花形，CRM，RPA，損益分岐点分析，著作権法

出題される内容は，過去の応用情報や基本情報技術者試験で出題されたことがある基本的な問題が大半を占めます。高度系試験で専門分野の力を発揮するのは午前Ⅱ試験からになりますが，試験対策としては，過去の応用情報技術者試験の午前問題を解き，余裕をもたせて 7 割以上正解できるよう確実に実力を付けてください。

そのために，最近 2 年間ぐらいの応用情報技術者試験で出題された問題を解いてみて，理解できていない内容を中心に学習することをお勧めします。また，AI，IoT，ビッグデータ関連は新しい用語がこれからも出てくると思われるので，日ごろから IT 関連の話題には注目し，内容を把握しておきましょう。

(2) 午前Ⅱの問題

25 問のうち，分野別の出題数は，「技術要素」から 21 問，「開発技術」から 2 問，「サービスマネジメント」から 2 問という比率でした。この比率は，第 1 回

の平成 29 年度春期試験以降，同じですから，今後も変更はないと考えられます。なお，25 問のうち，新規問題の出題数は平成 31 年度春期試験の 6 問から 1 問増え，7 問になりました。セキュリティとネットワークの 20 問で比較すると，新規問題は 5 問と同じですが，レベル 4 の問題が 2 問含まれていますから，難易度は若干難しくなったといえます。

技術要素

技術要素からの出題範囲は，セキュリティ，ネットワーク，データベースの 3 分野です。分野別の出題数は，セキュリティが 17 問，ネットワークが 3 問という比率で定着していましたが，今回は，セキュリティが 18 問，ネットワークが 2 問という比率になりました。

セキュリティ分野の 18 問のうち，17 問が情報セキュリティ技術に関するもので，情報セキュリティ管理（マネジメント系）分野からの出題は 1 問でした。新規問題は，問 1（FIDO UAF 1.1 に基づく認証処理），問 10（BlueBorne の説明），問 14（常時 SSL/TLS のセキュリティ上の効果），問 15（専門知識がない攻撃者でも攻撃ができるもの）の 4 問ですが，問 1 と問 11 がレベル 4，問 14 と問 15 がレベル 3 といえます。これに対し，過去問題からの出題は，平成 30 年度秋期から 1 問，平成 30 年度春期から 6 問，平成 29 年度秋期から 1 問，平成 28 年度秋期から 1 問，平成 27 年度春期から 2 問，平成 26 年度秋期から 1 問の他，他種別（ES，SA）から 2 問の計 14 問が出題されていました。ES や SA で出題された問題は，新規問題とみなすこともできますが，ここでは便宜上，過去問題という分類にしています。

ネットワーク分野の 2 問は，新規問題が 1 問，過去問題が 1 問でした。新規問題は問 19（IP パケットの分割処理と再構築処理）で，レベル 3 の問題です。過去問題は問 20（TCP に関する記述）で，平成 28 年度秋期試験で出題されていました。

データベース分野の問 21（JSON 形式で表現されるデータのデータベース格納方法）は新規問題で，レベル 4 の問題といえます。

開発技術

開発技術からの出題範囲は，システム開発技術とソフトウェア開発管理技術の 2 分野です。システム開発技術分野の問 22（状態遷移図に追加すべき遷移）は新

規問題ですが，レベル 3 の問題といえます。ソフトウェア開発管理技術分野の問 23（マッシュアップの例）は平成 29 年度春期 ES 試験で出題されていました。

サービスマネジメント

サービスマネジメントからの出題範囲は，サービスマネジメントとシステム監査の 2 分野です。問 24（フェールソフトの考え方）は平成 29 年度秋期 SC 試験で出題されていました。問 25（システム移行のコントロール監査のチェックポイント）は平成 27 年度 SM 試験で出題されていましたが，レベル 3 の問題です。

(3) 午後 I の問題

午後 I 試験は，3 問の中から 2 問の選択です。毎回のように，Web 関連のセキュリティ問題が出題されていましたが，今回は出題されませんでした。問 1 は，電子メールのセキュリティに特化した技術要素の強い問題でした。そして，問 2 と問 3 は，ともにマルウェア感染を扱った問題でしたから，問 2 と問 3 を選択する受験者が多くなったのではないでしょうか。

また，前回（平成 31 年度春期試験）は，各問とも解答する小問数が少ないという状況にありましたが，今回，その点は改善されています。このため，正解できそうな問題については，丁寧に取り組んで，合格基準点をクリアできる点数を積み上げていくようにするとよいでしょう。いずれにしても，問題文に記述された内容や条件を十分に把握しながら，設問で問われていることに対して丁寧に取り組み，解答を作成していくことが，合格基準点をクリアすることの条件といえます。

問 1　電子メールのセキュリティ対策

問題のテーマが示すように，電子メールのセキュリティのうち，送信ドメイン認証技術の SPF（Sender Policy Framework），DKIM（DomainKeys Identified Mail），DMARC（Domain-based Message Authentication, Reporting, and Conformance）を中心とした問題です。この他，DNS サーバのゾーンファイルの見方の知識が必要とされます。これらの専門知識があれば，設問 1 から設問 3 までの多くの小問に正解できると思いますので，容易に合格基準点をクリアできそうです。なお，設問 4 は，どのような状況を思い浮かべるかによって解答を作成できるかどうかの分かれ目になります。

問２　セキュリティインシデント対応におけるサイバーセキュリティ情報の活用

問題のテーマはセキュリティインシデント対応におけるサイバーセキュリティ情報の活用ですが,全体的にネットワークセキュリティに関する知識が必要です。例えば，プロキシ認証，FW のフィルタリングルール，DNS の仕組みなどの知識があれば，かなりの小問に正解できると思われます。なお，設問 1(3)は，図 2 のマルウェアの動作の特徴を十分に把握して解答を作成することが要求されます。

問３　標的型攻撃への対応

本問は，標的型攻撃への対応をテーマとして，PC がマルウェアに感染して業務サーバ上の秘密情報を外部に送信したというインシデントを受け，その対策を考察する問題です。具体的な設問内容としては，PC がマルウェアに感染した際の初動対応, マルウェアに感染した PC でマルウェアが実行するコマンドの目的, インシデント対応手順の改善といった内容が設定されています。基本的な問題が多く，これまでに出題されたことのある小問も含まれています。しかも，専門的な知識が要求される設問が少ないことなどから，比較的正解を導きやすいといえます。

(4)　午後Ⅱの問題

午後Ⅱ試験は，問 1 がソフトウェア開発におけるセキュリティ対策，問 2 が工場のセキュリティというテーマでしたが，問 1 が Linux の知識が必要な問題，問 2 がランサムウェアの感染時における対応策などを考察する問題になっています。前回（平成 31 年度春期試験）は，問 1 がマルウェア感染と対策，問 2 が情報セキュリティ対策の強化というテーマで，どちらかというと 2 問ともネットワークセキュリティに関する知識が要求されるものでしたから，選択する問題を絞りやすかったと思います。

また，今回は，午後Ⅰ試験と同様，前回の試験とは異なり，解答する小問数が比較的多く設定されていましたので，この点は改善されています。また，前回は，問 1，問 2 とも，知識をベースにした小問の比率が比較的高かったのですが，今回は，問 1 の一部を除き，専門知識から解答する小問は少なくなっています。さらに，問 1，問 2 とも，字句選択式の小問が多かったことから，取り組みやすい問題だったといえます。一般に午後Ⅱ試験の合格率は，午後Ⅰ試験の合格率よりも低くなる傾向にありますが，今回の午後Ⅱ試験の合格率は，IPA の採点基準に

もよりますが，前回の 59.1%を超える可能性があります。

問１　ソフトウェア開発におけるセキュリティ対策

本問は，ソフトウェア開発におけるセキュリティ対策をテーマとしたものですが，出題内容としては，設問 1 で攻撃者がフィルタリングルールに追加したルールの意図を問うものや，会員情報の漏えいがなかった根拠を述べるものなど，メインとなる小問が出題されていました。設問 2 では，マルウェア対策として，四つの小問が設定されていましたが，この中では，(1)の対策 1～4 は，どの機能への対策になるかを選ぶものは，該当するものを全て選ぶので，注意しなければなりません。設問 3 は，開発・運用プロセスにおけるセキュリティ向上策に関するもので，専門用語を選択する(1)を除けば，(2)の記述式の小問を含め，一定の知識があれば取り組みやすいといえます。設問 4 は，全て字句選択式ですから，正解が得られやすいでしょう。難易度を全体的に評価すれば，標準レベルといえます。

問２　工場のセキュリティ

本問は，工場のセキュリティというテーマですが，設問は，設問 1 から設問 7 まで設定されていました。設問 1 はランサムウェアに関するもので，(1)の記述式の小問を除けば，易しいでしょう。設問 2 (1)は字句選択式，(2)は APT 攻撃の内容がどのステップに該当するかを選ぶものです。設問 3 は，無線 LAN の基礎知識，設問 4 はデータダイオード方式の効果と，USB メモリを使用する際の注意点などを述べるものです。設問 5 (1)は認証サーバの設置場所を答えるもので易しいといえますが，(2)はアクセスポイントへ不正アクセスが発生した場合を考慮して，見直し案におけるネットワークが優れている点を述べるので，設問で問われていることをよく確認し解答を作成することが必要です。設問 6 では，脆弱性が見つかった場合の対応方法などが，設問 7 では，セキュリティ規程の見直しに関するものなどが問われていますが，問題の条件などに従って，丁寧に解答を作成していけばよいでしょう。合格基準点をクリアするという意味においては，問 1 に比べるとやや易と判断されます。